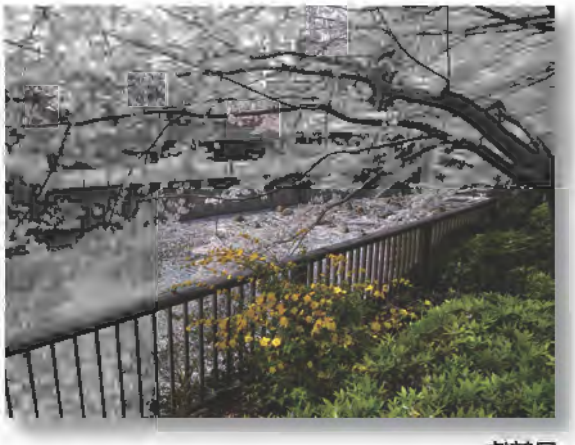
第２章　目黒区の風土(現状と課題)



お花見

私たちのまちの今を知る

みどりや旬を楽しんでいる私たちの日ごろの暮らしと、いきもののつながりを紹介し、武蔵野台地の一角で、長い時間をかけて培(つちか)われてきた目黒区の原風景や、新しい風景のイメージを示します。また、目黒区のプロフィールと区民による生物多様性に配慮した活動を紹介するなど、生物多様性を保全し、持続可能な利用をしていくうえでの現状と課題を示します。

2－1　自然に育まれている私たちの暮らし

（1）みどり[注1]を楽しむ

春になると、私たちはサクラの開花を心待ちにします。咲き出し、一分咲き、二分咲き…。満開を待ちきれずにたくさんの人々がサクラの名所に出かけます。お花見はツツジ、フジ、アジサイ、ハナショウブ、ハギ…と続き、秋が深まるころには、今度は赤や黄色に色づく木々の葉の風情を楽しみます。

お花見や紅葉狩りのほか、私たちはみどりの中に出かけてさまざまな活動を行い、気持ちをリフレッシュさせて暮らしのうるおいを得ています。社寺や史跡を巡って、絵を描いたり俳句づくりや地域の歴史・風土の学びを楽しんだり、ジョギングなどのスポーツで汗をかいて心身の健康を得ます。公園や学校では、落ち葉からの堆肥づくりや雑木林※の管理、ビオトープ※などの自然を活かした環境学習や地域のコミュニティづくりの取り組みが行われています。地域のお祭りも、四季折々のみどりの中で開催されています。春は目黒川、碑文谷公園などでサクラのお花見のイベントが開かれています。9 月の実りの季節には社寺の秋祭りのほか、目黒のさんま祭※が開催され、落語「目黒のさんま※」ゆかりの食材サンマが気仙沼市などの協力によって参加者に振舞われます。秋の文化財ウィークには、旧前田家本邸※(駒場公園)などを巡るイベントが開かれています。

目黒十五(とうご)庭※や目黒天空庭園※など施設の屋上に整備された公園等からは、広い空やみどりと一体になったまちなみを臨むことができます。

広い空の下の目黒天空庭園

花をつくる

目黒十五庭

碑文谷公園のボート

秋祭り

駒場公園(和館)

写真　みどりを楽しむ

注1　「みどり」　植物の緑だけではなく自然的環境を含む概念（目黒区みどりの基本計画※）

（2）旬に親しむ

私たちの毎日の暮らしも、春夏秋冬の季節や気候と切り離すことはできません。食卓に上る食べ物には旬(しゅん)があります。むかしの目黒は、春のタケノコ、夏の節成(ふしなり)きゅうり※、また、目黒不動の甘藷(かんしょ)祭※で有名なサツマイモなどの産地でもありました。

また、かつて季節に応じた農作業などを行う目安となった二十四節気※は今でも生活の中に息づいていて、立春、啓蟄(けいちつ)、夏至、秋分などの歳時が現代に伝えられています(P.4)。

（3）いきものに出会う

ウグイスの初音※を聞いた、ツバメが渡って来た、ツクシを見つけたなど、身近な場所でのいきものの話題が区に寄せられます。住宅地の広がる目黒区は、日々の生活の中に、いきものたちとのふれあいがあります。通勤通学、買い物や散歩の途中に、ちょっと立ち止まって空を見上げたり耳を澄ませば、あちらこちらにいきものたちの気配を感じることができます。

目黒区が誕生して 80 年の間にまちの環境は大きく変わりましたが、日常的にふれあうことができるいきものは、まだまだ身近に暮らしています。区制施行 80 周年記念事業として実施した「みんなで選ぶ めぐろのいきもの 80 選」では、子どもたちの未来に向けてまもり、伝え、呼び戻したいふるさとめぐろの 80 種の「身近ないきもの」が選ばれています。

表 2-1 「みんなで選ぶ めぐろのいきもの 80 選」で得票数の多かった上位８種のいきもの

(全リストは附属資料―2(P.80)参照)

順位	種名	選んだ理由(例)
１位	ヤモリ	現在すんでいる家で見られるから、後世にもつなげられたらよいと思う
２位	メダカ	身近にどこにでもいてほしい生きものたちが、これからも目黒で見られることを願っている
３位	ヒキガエル	我家に生息しているので、このまま生息し続けてほしい
４位	ソメイヨシノ	目黒川沿いのサクラは区民として誇れる財産
５位	アマガエル	自分の子どものころにはよく見かけたのに、最近はあまり見かけなくなった
６位	スズメ	スズメなどどこにでもいそうな鳥が減少しているといわれています。そういった身近ないきものが大切だと思いました
７位	ツバメ	長年見つづけて、心をいやされています。孫たちにも見つづけてほしい
８位	シジュウカラ	区の鳥だから、見まもりたい

写真 ベスト８(左から順に１位から８位)

2－2 区の概要

（1）位置・人口

目黒区は武蔵野台地の東端に位置し、目黒川などの崖線(がいせん)*に残る緑地を通じて自然豊かな奥多摩などの郊外の緑地とのつながりを見ることができます。東京23区南西部に位置しており、北は渋谷区、東は品川区、西は世田谷区、南は大田区に接しています。目黒区総合庁舎の位置は、北緯35度38分、東経139度41分です。

面積は、14.70㎢で、東京23区の2.4%に当たり、23区中16番目の広さです。

人口は、267,379人、148,794世帯(2014(平成26)年1月1日現在住民記録)で、人口密度は、1㎢当たり18,189人です。区では、2013(平成25)年度住民基本台帳ベースで、2015(平成27)年をピークに人口が減少に転じると予測しています。

図2－1
目黒区を流れる川[R]

区の地形は、武蔵野台地を南北に切れ込むように東側に目黒川、西側に呑川が流れ、目黒川の北東側は「淀橋台」、呑川の南西側は「荏原台」、この二つの間は「目黒台」と呼ばれています。二つの川が台地を入り込むように刻み、坂の多いことが特徴となっています。

目黒区には目黒川、立会川、呑川が流れ、それぞれに支流を持ち、いずれも東京湾にそそぐ河川です。区内の川の多くは下水道の幹線として整備され、上部は緑道などとなっています。水面が見えるのは大橋から下流の目黒川と、緑が丘3丁目の呑川の一部で、東京湾の生態系とつながっています。また、目黒川水系には、蛇崩川、北沢川、烏山川などがあり、世田谷区、目黒区、品川区を流れています。

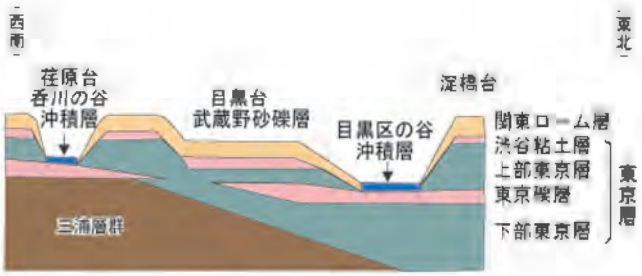


図2－2　目黒区の地層[R]

湧水は、目黒川をはさんだ両側の台地の崖(がけ)などに見られましたが、今では多くが枯れてしまいました。池は、かつて農業用のため池だった碑文谷公園弁天池や清水池公園の清水池のほか、駒場野公園(大池)や東京大学駒場Ⅰキャンパス内の一二郎池(いちにろういけ)、東京工業大学大岡山キャンパス内のひょうたん池などがあります。

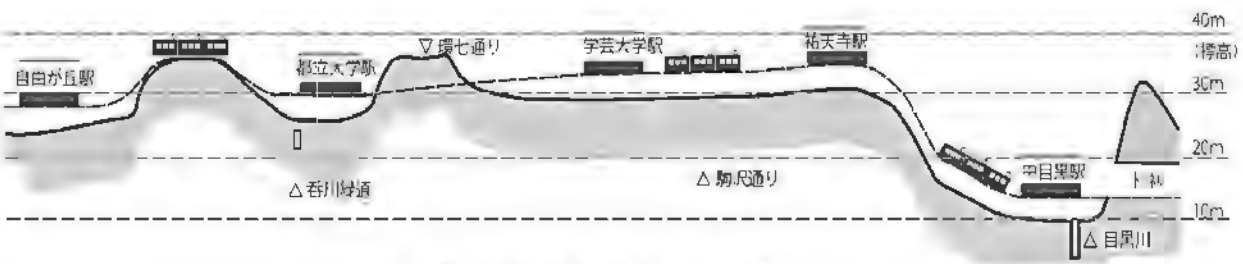


図 2-3　東横線から見た目黒区の起伏[R]

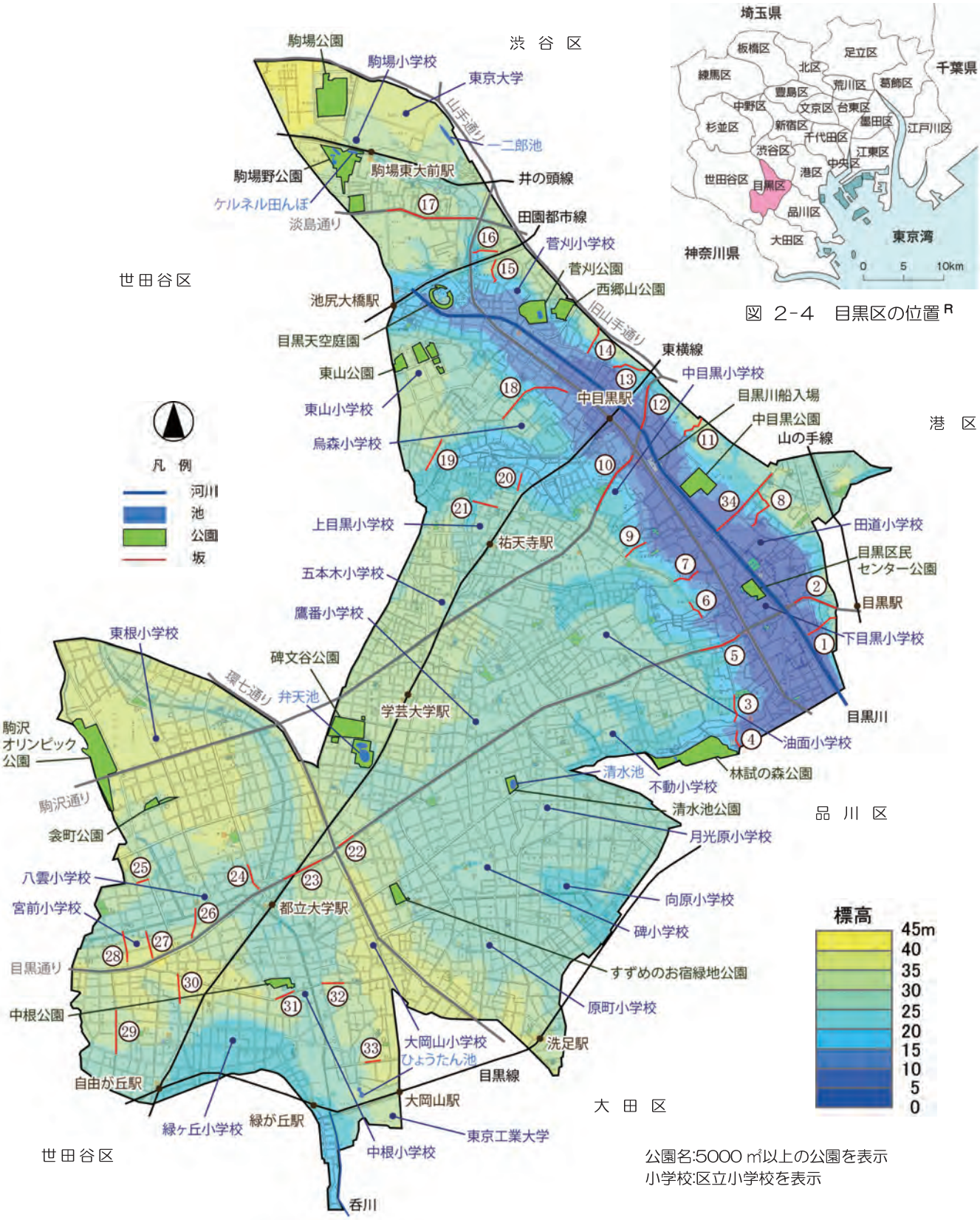


図 2-4 目黒区の位置[R]

公園名:5000 ㎡以上の公園を表示
小学校:区立小学校を表示

No.	坂 名	9	なべころ坂	18	小川坂	27	しどめ坂
1	行人(ぎょうにん)坂	10	けこぼ坂	19	半兵衛坂	28	太鼓(たいこ)坂
2	権之助坂	11	別所(べっしょ)坂	20	稲荷(いなり)坂	29	谷畑(やばた)坂
3	三折(みおり)坂	12	新道(しんどう)坂	21	謡(うたい)坂	30	睦(むつみ)坂
4	石古(いしこ)坂	13	目切(めきり)坂	22	どぜむ坂	31	寺郷の坂
5	金比羅(こんぴら)坂	14	上村坂	23	柿の木坂	32	鉄飛(てっぴ)坂
6	十七が坂	15	相(あい)の坂	24	天神坂	33	鶯(うぐいす)坂
7	馬喰(ばくろ)坂	16	大阪	25	化(ばけ)坂	34	新茶屋坂
8	茶屋坂	17	松見坂	26	氷川坂		

図 2-5 目黒区の坂[R]と標高

（2）歴史

目黒区は、旧石器時代から人がすんでいたとされています。縄文時代になると大規模な集落があったことが遺跡の調査により確認されています。東山貝塚の遺跡では、ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・ヤマトシジミなどの貝殻や、クロダイ・アジ・フグ・コイなどの魚の骨、イノシシ・シカ・イルカなど動物の骨も発見され、自然の恵みを受けていたことがわかります。

図 2-6　縄文時代の東山遺跡付近の想像図[R]

目黒の名は、鎌倉幕府の公的記録に武蔵武士「目黒」と記載されていますが、地名の由来は定かではありません。江戸時代には、江戸に生鮮野菜などを供給する近郊農村として発展し、大根やナス、ウリなどを江戸へ出荷したことが記録されています。また、目黒不動尊など目黒三社※は「目黒詣(もうで)」として江戸庶民で賑わう行楽地でした。

将軍の鷹(たか)狩り※の場としても有名になり、そのひとつだった当時の駒場野は、人の背丈ほどもある笹が一面に生え、ところどころに松林が茂る広大な武蔵野の原野で、キジやウズラなどの鳥をはじめイノシシ、ウサギなどが多く生息していたといわれています。

明治以降も野菜栽培は盛んで、「目黒のタケノコ」として有名になった春のタケノコに始まり、夏はナス、マクワウリ、キュウリ、トマト、スイカ、秋は大根、ネギ、冬は葉物というように、畑を効率よく利用した輪作が行われました。しかし、昭和以降、東京都心の発展に伴い市街化が進み、駅を中心に竹林や畑が宅地へと変わってゆきました。1932(昭和 7)年、目黒町と碑衾(ひぶすま)町が合併して目黒区が誕生しました。瀧泉寺(目黒不動)、円融寺などの古くからある寺や東京大学、東京工業大学などの文教施設も多く、歴史に彩られ、文化の薫りを感じるまちとなっているほか、自由が丘や、学芸大学、中目黒などの個性豊かな商店街が広がるまちとなっています。すみやすいまちとしての人気も高く、まちかどの隅々までみどりや花を見かけます。住宅地が広がる目黒では、日ごろから身近な場所でいきものとのふれあいがあります。

写真　東山上空から、目黒川と目黒天空庭園※を見る(右手 品川区を経て東京湾に至る)

2－3 めぐろの風景

（1）むかし見たいきものたち

区の行ったいきもの調査から、むかしの目黒区の風景を想像することができます。

表 2-2 むかし見たいきもの調査[R]

時代と場所	いきものの記憶(いきものの名称は原文で記載しています)
大正末から昭和6、7年くらい(1920年代)までの思い出。呑川境橋のすぐ傍らの家(緑が丘在住自然通信員※)	・対岸は低い粘土岩の崖になっていて、蟹(カニ)が穴から出てきた。 ・浅い流れの砂地には、丸い輪があり、掘るとシジミが出てきた。 ・東工大の今のグランドは原っぱで、キチキチバッタが音をたてて、飛び跳ねた。 ・川べりには、オハグロトンボと呼んでいたトンボが無数にいて、舞っていた。 ・夕方はカナカナゼミの大合唱で蛍も飛んでいた。フクロウの啼声を耳にした。 ・緑が丘駅に行く道は、左右ほとんど野原で、兎を見かけた。 ・呑川にはハつ目鰻がいて、目のくすりになると取りにきていたし、普通の鰻も橋の下のよどみで捕らえている人もいた。 ・カブトムシ、それにあの美しいタマムシ、ミズスマシ、ゲンゴロウもいた。
小学生(戦前・1940年代) 中里橋付近	・戦前の目黒川で、ハゼ、フナを釣った、川がきれいでないので食べなかった。 ・なべころ坂の上にガスタンクがあり、キジを撃ちに行った。
小学生(戦前・1940年代) 田楽橋付近	・七夕かざりや、お盆のときのお供え物はマコモ(水辺の植物)で覆って目黒川に流した。
小学生(戦前・1940年代) 蛇崩川	・粘土をとって遊んだ。川の周りは畑で、肥溜(にえだ)めが多かった。 ・肥溜めに落ちてしまった時は、家に帰ると叱られるので、近くの湧水がでるところで体を洗った。
小学生(戦前・1940年代) 中目黒周辺	・船入場※は子どもの遊び場で、引き潮の時間は膝下まで泥に浸かるくらいの深さで「ザリガニ釣り」をした。 ・生活用の水は、水道と井戸水の両方を使っていた。 ・し尿の汲み取りと生ごみを引き取ってくれる人が大八車で来た。
小学生(戦前・1940年代) 目黒川船入場	・目黒川が洪水を起こした後は、「ナマズ」や「コイ」がたくさんとれた。 ・染物屋さんが「友禅流し」をしていたのはよく見た。 ・「水車」があったかどうかは覚えていない。
1950年ころ。東京工業大学大岡山キャンパス付近(大岡山在住自然通信員)	・庭隅の里ザクラの焼木杭からやっと育った枝で玉虫が三年ほど育って、毎年一、二匹は息子の愛用物となった。 ・群れを成して飛んでいた「コジュケイ」、柿の木には百舌(モズ)の贄(にえ)※が見つかり、杜鵑(ホトトギス)の声も聞かれた。 ・土の中には土龍(モグラ)もいて飼い犬が時折捕らえては遊んでいた。 ・ホタル＝1954(昭和29)年、スズムシ、ガチャガチャ＝1955(昭和30)年、銀ヤンマ＝1984(昭和59)年……。
小中学生時代(1950年代)中目黒八幡神社と正覚寺のほぼ中間付近(中目黒在住自然通信員) ヒゲコメツキ	・中目黒八幡神社の、裏手の林の茂みにはアオダイショウが、池の周りにはヤマカガシが時々すがたを見せた。 ・シラカシやイチジクにはコクワガタ、ノコギリクワガタ、ミヤマカミキリなどが樹液に集まり、ゴマダラカミキリ、シロスジカミキリなども灯火をめがけて飛来。外灯にはドウガネブイブイがたくさん集まり、祖母はコフキコガネやカナブンなどを含めて、これをコウタムシと呼んでいた。 ・私にとって境内最高の獲物はヒゲコメツキのオス(1954(昭和29)年)。襟首に落ちてきたのを払い落としたので片方のヒゲ(触角)が切れてしまい、嬉しくもあり悲しくもあった。

（2）私たちの原風景

目黒区には、駒場野、向原、月光原など、かつて武蔵野台地の一角で原野が広がっていたことを思い出させる地名が残されています。江戸から昭和にかけて残る絵図には、原野や農村が広がるようすが描かれたものがあります。また、昭和以降になると写真も残されており、これらの風景は、めぐろの原風景(私たちの原風景)ともいえるものです。

資料からは、かつての地域のいきものやいきものがすんでいた環境を垣間見ることができます。

図2－7　松見坂から見た駒場野の風景。
江戸名所図会 駒場野Rより

図2－8 目黒碑衾村より祐天の森を望む。1898(明治31)年ころの風景。東京近郊名所図会Rより

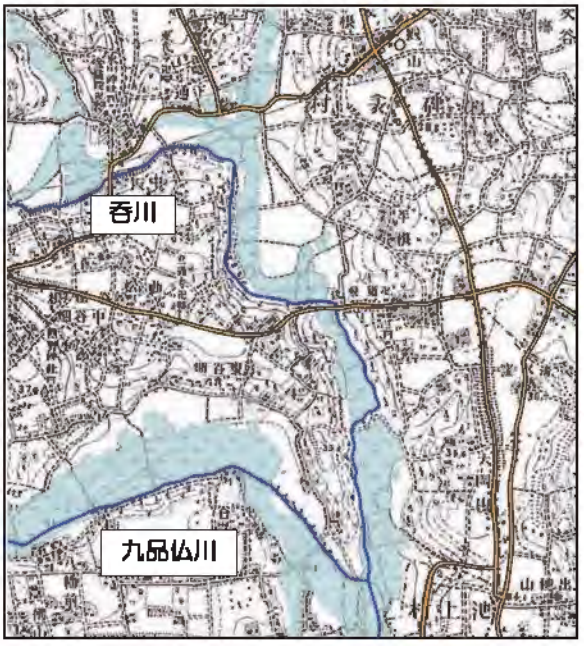


図2－9　1909(明治42)年の呑川付近の地図R
水色の部分は水田等の農耕地を示す

図2－10　1929 (昭和4)年の呑川付近の地図R
目黒区誕生のころ、鉄道が敷かれ住宅地の区画整理が進むようす。水田等の農耕地が減少

碑文谷警察署前の目黒通り(昭和初期)

明治末期の八雲付近の田園風景(1912(明治45)年ころ)

目黒本町付近の立会川(昭和20年代)

碑文谷公園弁天池付近の風景(昭和初期)

鉄道開通前後、柿の木坂付近の竹やぶと東横線の工事(昭和初めころ)

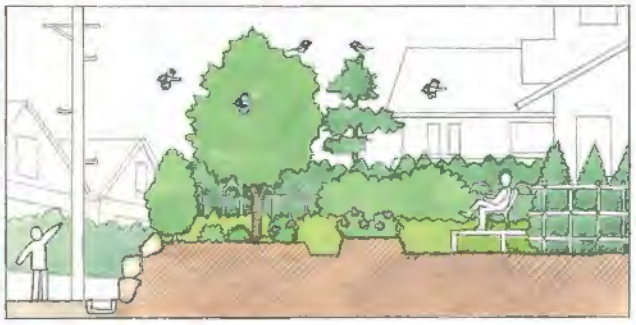
府立高等学校予定地(その後の都立大学)から見た富士山
(1930(昭和5)年ころ)

写真　残されている写真から見る目黒区のむかしのようす[8]

（3）今に伝えられている風景･新しい風景

現在の目黒区の風景には、住宅地に残されたみどり、社寺や公園などにむかしから残る森、川や池などかつての目黒を思い起こさせる風景がある一方、都市化によって新しく生まれた風景もあります。ここでは、区民から寄せられた自然のニュースなどを基に、いきもののすむ特徴的な８つの環境を「めぐろの風景」として示します。

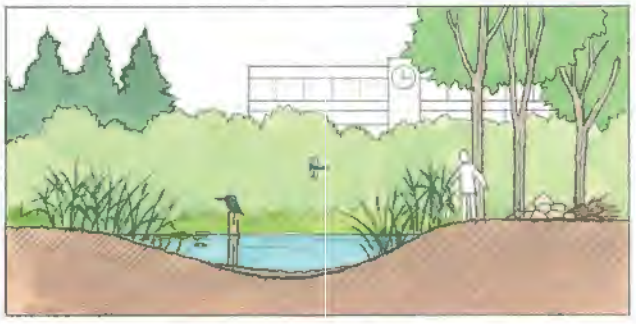
○ 庭のある風景



庭の木々やベランダの鉢植え、道路沿いの生け垣や花壇など、多様なみどりの広がる住宅地です。多種類の植物や、モザイク状に点在する緑地が変化に富んだ「土」の場所をつくり、多様ないきものがみられます。

【具体例】目黒区全域に広がっています。

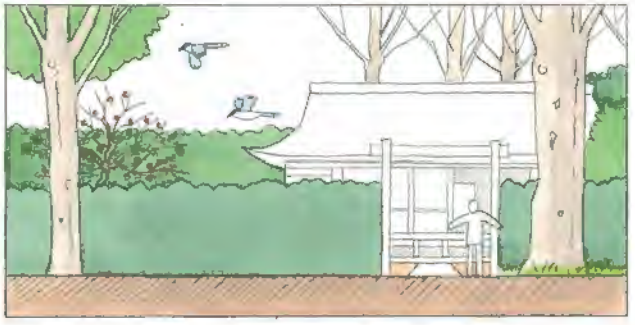
○ 小さな水辺の風景



公園や校庭、庭には、いきものがすむ小さな池がつくられています。都市の中では少なくなったこのような場所には、水辺を求めてトンボなどの水生昆虫が飛来しています。ビオトープ※の池はこれまでにはなかった目黒区の新しい風景です。

【具体例】学校や公園のビオトープ池、庭の中にある池

○ 屋敷林や鎮守の森、学校の森の風景



住宅地の中に点在する樹林で、古くから伝わる屋敷林や、鎮守の森といわれた神社の森、お寺の森、公園や学校の森など、地域のいきものの生息拠点となっている樹林です。

【具体例】駒場公園、碑文谷公園、中根公園、すずめのお宿緑地公園 、宮野古民家自然園、各学校の森、各地の社寺など

○ 草はらの風景

大きな公園の園路沿いや校庭周辺、線路脇の土手などに見られる原っぱ、学校の野草や雑草園、芝生の校庭などです。

【具体例】中目黒公園 、東京大学駒場Ⅰキャンパス、東京工業大学大岡山キャンパス、碑文谷公園、線路の土手など

○ 雑木林や畑・水田の風景

人の手が入ることによって保ち、伝えられる林や田んぼ、畑の風景です。雑木林はクヌギやコナラなどの林で、伐採による更新作業が繰り返される中で、スミレなどの野草が芽生えます。畑はわずかに残ります。水田は里山※の環境としてここに含めます。

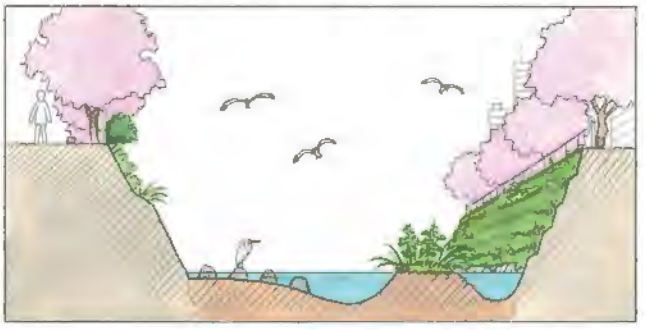
【具体例】駒場野公園 、菅刈公園、区民キャンパス公園、各地の生産緑地※など

○ 都市の森の風景

大規模な緑地のある地域で、大学や研究所などに残る大きな樹林、目黒川に沿った崖に連続して見られる樹林などです。区内のみどりの拠点となっています。林業試験場跡地の林試の森公園は多種類の樹木があり、他とは違った環境を形成しています。

【具体例】都立林試の森公園 、都立駒沢オリンピック公園、東京大学駒場Ⅰキャンパス、東京工業大学大岡山キャンパスなど

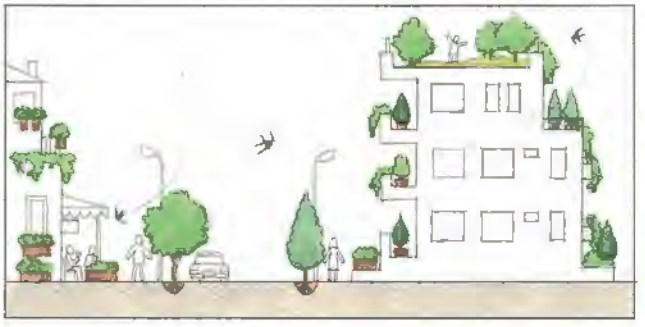
○ 広がりのある水辺の風景



かつて農業用に使われていた碑文谷公園弁天池や清水池、海とつながっている目黒川や呑川の下流の風景です。目黒川には東京湾からボラ、アユやハゼ類などの魚が遡上してきています。

【具体例】碑文谷公園弁天池、清水池、目黒川、呑川(緑が丘３丁目より下流)など

○ 新しいみどりの風景



都市の中で建物の屋上やベランダ、壁面の緑化、商店街でのフラワーポットの設置等、目黒区の新しい風景です。緑化された屋上には、チョウやバッタ等の昆虫や野鳥が飛来するようになっています。

【具体例】目黒十五庭※、目黒天空庭園※など

（4）自然のすがた

図2−11　いきものの暮らす場所　目黒川流域の空川の源流部近く、駒場野公園と東京大学駒場Ⅰキャンパスの間に見られる谷戸(やと)※の地形の断面と、そこに見られるいきものを駒場野自然クラブ※の調査[R]を参考に示したものです。いきものは種ごとに特有な生活スタイルがあるなど、それぞれ生息、生育にふさわしい環境の条件を持っています

○ みどりのようす

目黒区では、住宅地内の庭などに小面積の緑地がモザイク状に広がっており、その中に公園等のまとまった緑地、社寺林※等が点在しています。

2003(平成 15)年度実施の緑の実態調査では、緑被率※は 17.1%で、緑被のうち樹木に覆われている部分が 87%と多いことが特徴です。また、緑被の約 60%が民有地にあります。

樹木の本数は 26,947 本、樹木の種数は 223 種で、内訳は街路樹が 2,923 本、その他の樹木(地上 1.5m で幹の直径が 20 ㎝以上の樹木が対象)が 24,024 本です。

樹木本数の多い敷地は、東京大学駒場Ⅰキャンパス(1,140 本)、駒場公園(692 本)、都立林試の森公園(484 本)などです。

また、みどりの条例※により、保存樹木 536 本、保存樹林 26 箇所(8.6ha)、保存生け垣 64 箇所 2.5km が指定(2014(平成 26)年 1 月 1 日現在)され、民有地の樹木の保全が図られています。

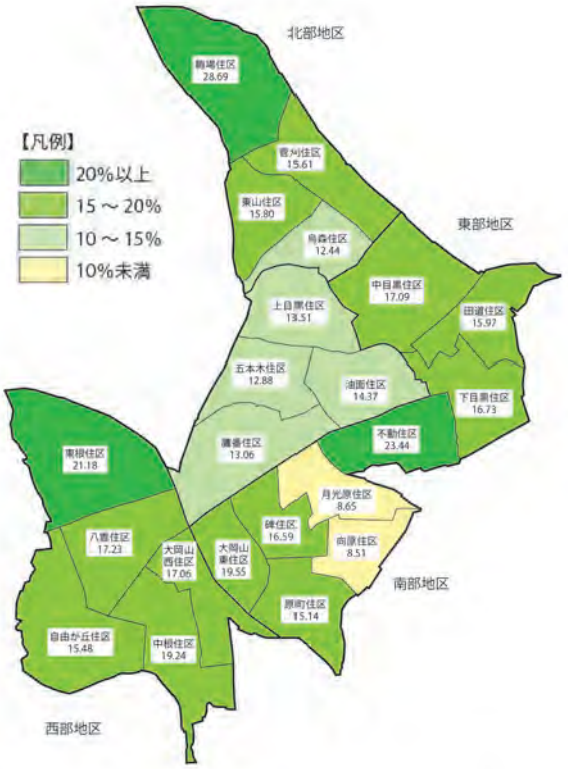


図 2-12 住区※別緑被率 R

《本数の多い樹種》R

〈街路樹〉			〈その他〉		
1 位	イチョウ	1,543 本	1 位	スダジイ	4,745 本
2 位	サクラ	984 本	2 位	サクラ	3,478 本
3 位	モミジバフウ	719 本	3 位	ケヤキ	1,974 本
4 位	ハナミズキ	441 本	4 位	イチョウ	1,598 本
5 位	トウカエデ	409 本	5 位	ヒマラヤスギ	1,220 本

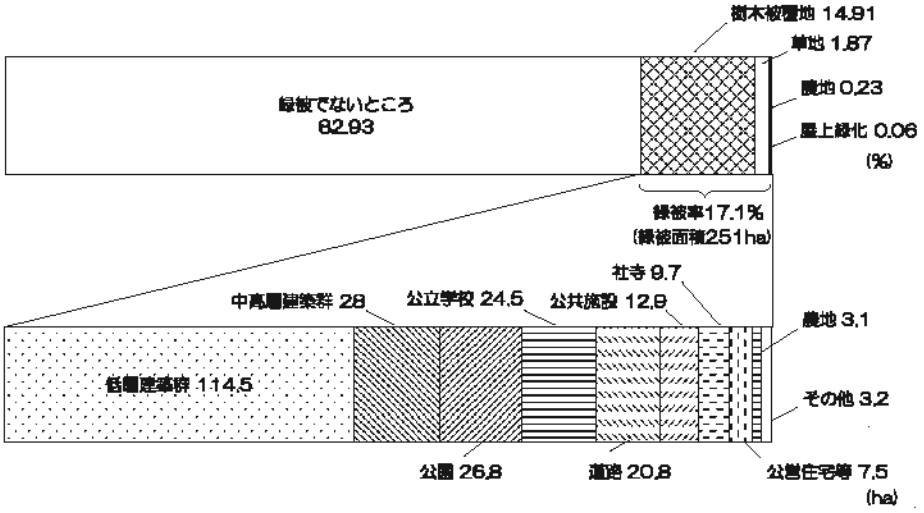


図 2-13 目黒区の土地利用区分別の緑被の構成 R

○ 目黒区いきもの住民台帳※（目黒区の動植物リスト）

区内で見られる野生動植物について、自然環境調査や区民参加調査、文献調査などを行い、種名のリストとして集計したものが「いきもの住民台帳※」（動植物目録）です。

「いきもの住民台帳」によると、区内で確認されているいきものは 2,956 種です。市街化が進んだ都会でありながら、まだ数多くのいきものが暮らしていることがわかります。これは、住宅地や公園のみどり、目黒川などの水辺など多様な環境があるほか、自然通信員※等の区民による継続した観察の記録（区民による身近な生物調査※等）が区に集約されているためです。自然通信員には 2013（平成 25）年現在約 1,100 世帯が登録しています。

国や東京都は、絶滅のおそれのある野生生物の種についてリスト（レッドリスト※）を作成し公表していますが、区内には、このような希少ないきものも生息しています。一方、ワカケホンセイインコやミシシッピーアカミミガメ、アカボシゴマダラ（チョウ）などの外来生物※も生息しています。

表 2-3　目黒区の動植物種数（2009（平成 21）年３月までのいきもの住民台帳※を集計）

分類	区内確認種類数注1	絶滅のおそれのある種等注2																特定外来生物※
		東京都										国						
		絶滅	野生絶滅	Ⅰ類 絶滅危惧	Ⅰ A類 絶滅危惧	Ⅰ B類 絶滅危惧	Ⅱ類 絶滅危惧	準絶滅危惧	情報不足	留意種	合計	Ⅰ A類 絶滅危惧	Ⅰ B類 絶滅危惧	Ⅱ類 絶滅危惧	準絶滅危惧	情報不足	合計	
植物	1,361	7			1	3	11	7	1		30			3	5		8	2
きのこ類	258												1			1	2	
哺乳類	8									1	1							
鳥類	170	3			10	8	19	6	4		50	1	2	6	7	1	17	1
爬虫類	12			2		3	2	1	1		9				1	1	2	1
両生類	8				2	3		1			6				1		1	1
魚類	31			2			1	1		3	7		1	1		1	3	3
クモ類	118						2				2							
昆虫類	990	7		3	7	4	9	16	7	3	56		1		4	1	6	
合計	2,956	17		7	20	21	44	32	13	7	161	1	5	10	18	5	39	8

注１　確認種数は、過去の記録も含んでいます。種には、亜種や品種等も含まれています
注２　東京都と国（日本）の両方の指定のある種もあります

○区民による身近な生物調査

身近な自然のようすやその変化を知るために、区民の参加で身近ないきものを調べています。参加者は、自然通信員として区に登録します。自然通信員は主にツバメやタンポポなど区民に親しまれ観察のしやすいものや、温暖化などの環境の変化を把握しやすいものを観察し、区に報告しています。

ヒナを育てるシジュウカラ

表２－４　区民による身近な生物調査の指標種の例

場所	継続してみんなで調べる指標種の例
庭や公園等	カネタタキ、アカボシゴマダラ、ヒキガエル、トカゲ類、ヤモリ、ウグイス（初音）、シジュウカラ（巣箱）、スズメ
小さな水辺	シオカラトンボ類、赤トンボ、ヒキガエルの産卵する池
屋敷林	カントウタンポポ、クワガタ類、ナガサキアゲハ
草はら	スギナ、ススキ、ハギ、シロチョウ類、オンブバッタ
雑木林	タチツボスミレ、アオスジアゲハ、ヘビ類
大きな緑地	セミ類、ジョロウグモ、コゲラ、オナガ
川や池	サギ類、ユリカモメ、カモ類、ツバメ

《区民による身近な生物調査の集計例》

冬越しするウグイス

庭のオンブバッタ

図2－14 ウグイスの初音を聞いた場所 (2013 (平成25)年調査より)

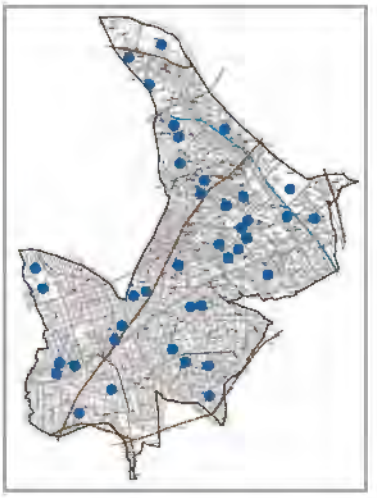


図2－15 オンブバッタを見た場所 (2010(平成22)年調査より)

《区・地域の特徴的な種》

地面にすむアオオサムシ

大学構内に咲く
シロバナタンポポ

表2－5 目黒区の甲虫 10 選 R

1	アオオサムシ
2	ヒラタクワガタ
3	ドウガネブイブイ
4	タマムシ
5	ユミアシゴミムシダマシ
6	クロホシクチキムシ
7	ベニバハナカミキリ
8	トラフカミキリ
9	アカガネサルハムシ
10	シロコブゾウムシ

表2－6 東京大学駒場Ⅰキャンパスの植物 10 選 R

1	ヒメウズ
2	カントウタンポポ
3	シロバナタンポポ
4	タチツボスミレ
5	マルバスミレ
6	セリバヒエンソウ
7	シロバナヒガンバナ
8	ソメイヨシノ
9	イチョウ
10	ウメ

《近年、区内で初めて登録された種(抜粋)》

ラミーカミキリ

表 2-7 はじめまして、めぐろ (2009～2013 年に目黒区で新たに観察された種から選択)

きのこ類		ホウネンタケ、トキイロヒラタケ、ミヤマシメジ、テングタケ
植物		タシロラン
昆虫	トンボ類	アオモンイトトンボ、ヒメアカネ
	バッタ類	ヒゲシロスズ、ウスイロササキリ、イナゴモドキ、ツチイナゴ
	カメムシ等	トガリヨコバイ、フタモンホシカメムシ
	甲虫類	コアトワアオゴミムシ、コルリアトキリゴミムシ(外来種)、オオクロコガネ、ウバタマムシ、ノハラボタル(外来種)、ラミーカミキリ
	ガ類	クスオビホソガ、セミヤドリガ、ヒメツバメアオシャク
	チョウ類	ホソオチョウ(外来種)、クロマダラソテツシジミ R
爬虫類		ハナガメ(外来種)、ヒバカリ
鳥類		オカメインコ(外来種)、コマドリ、ヤブサメ

《目黒区で発見された新種 R》

表 2-8 はじめまして、世界

和 名 エドクロツヤチビカスミカメ

大きさが 2.5 ミリ程度のカメムシで、2013 年 6 月に東京大学駒場Ⅰキャンパスのアカメガシワの花で研究グループが採集し、新種であることが分かりました。学名は、発見場所からコマバヌスとつけられました。都市化の進んだ目黒区ですが、まだ自然の残る大学構内で生き残ってきたと考えられています(写真左)。都市でも、地道な調査を継続することの大切さが示されています。

（5）区民の活動

○ 公園等での活動の例

駒場野・菅刈・中目黒・碑文谷・東山の各公園、目黒天空庭園※では、現在 17 の公園活動登録団体※が園芸や健康づくり、いきものの生息環境の保全などの活動をしています。また公園や緑道の花壇では、89 団体のグリーンクラブ※が活動しています。駒場野公園では、駒場野自然クラブ※や地域団体等の参加で、雑木林※等の里山※管理が継続されています。

○ 地域の活動の例

こまばリサイクルの会※は、駒場野公園を拠点として 2003(平成 15)年から落ち葉や生ごみのリサイクルによる堆肥をつくる活動をしています。活動には PTA も参加し、できた堆肥は公園内の「キッチンガーデン※」で利用し、野菜づくりにも取り組んでいます。

自由が丘商店街ではまちのみどりを増やしていくために民間企業や商店主と協力して、屋上の緑化や自動販売機の上部の緑化など「自由が丘森林化計画※」を推進しています。また、吸蜜(きゅうみつ)植物※を植えたプランター等の設置を進めながらビルの屋上で養蜂を行い、その蜂蜜を利用した自由が丘オリジナルスイーツを販売する「丘ぱちプロジェクト」も行っています。ミツバチの受粉により木々を実らせるなど、いきものののつながりをまち全体に広げた総合的な緑化の取り組みとなっています。

公園まつり(碑文谷公園・菅刈公園)

ブドウの栽培(目黒天空庭園)

まちかどの緑化活動(自由が丘)

有機栽培の活動(中目黒公園)

在来種※回復活動(東山公園)

ホタルのすめる環境づくり
(駒場野公園)

種から育てる園芸の活動
(中目黒公園)

堆肥づくりの活動(駒場)

写真　公園や地域での取り組み例

○ 学校の活動の例

小中学校では、自然宿泊体験教室、環境教育、食育※、伝統文化芸能等の学習、エコスクール※(屋上緑化、みどりのカーテン※、落ち葉だめやビオトープ※活動、太陽光発電施設の導入、環境学習のための施設整備等)などの取り組みを推進しています。また、環境負荷の低減、地域に根ざした活動を行う「学校版めぐろグリーンアクションプログラム※」を推進しています。

ビオトープは 21 の区立小学校と幼稚園に設置され、いきものとふれあい、自然の大切さを学ぶ場所として活用されています。

○ 事業所(企業)が取り組む活動の例[R]

例１　企業(建設業)による自然調査への取り組み。目黒区総合庁舎屋上庭園でキジバト、メジロ、ハクセキレイ、ツグミ、ジョウビタキ、カワラヒラ等を確認。

例２　企業(情報処理機器等リース業)による社会貢献活動。子どもたちに自然や生きものの大切さを伝えるため、ビオトープづくりを通じた環境教育プログラムに取り組む(目黒区では下目黒小学校でビオトープ池の再生事業を行いました)

例３　企業(建設業)による自然調査への取り組み。調査対象の区立公園で絶滅のおそれのある種であるアブノメ(植物)、モズ・ヤマガラ(鳥類)、ヒメアカネ(昆虫)を確認しました。

例４　企業(都市高速道路建設・管理業)による在来の自然環境再生への取り組み。大橋ジャンクション屋上に「おおはし里の杜(もり)」を整備し、動植物の経年変化を調査中。

○ 区民の意識

みどりの量は多く感じていますが、みどりとのふれあいの場や機会が少ないと感じていることがうかがえます。

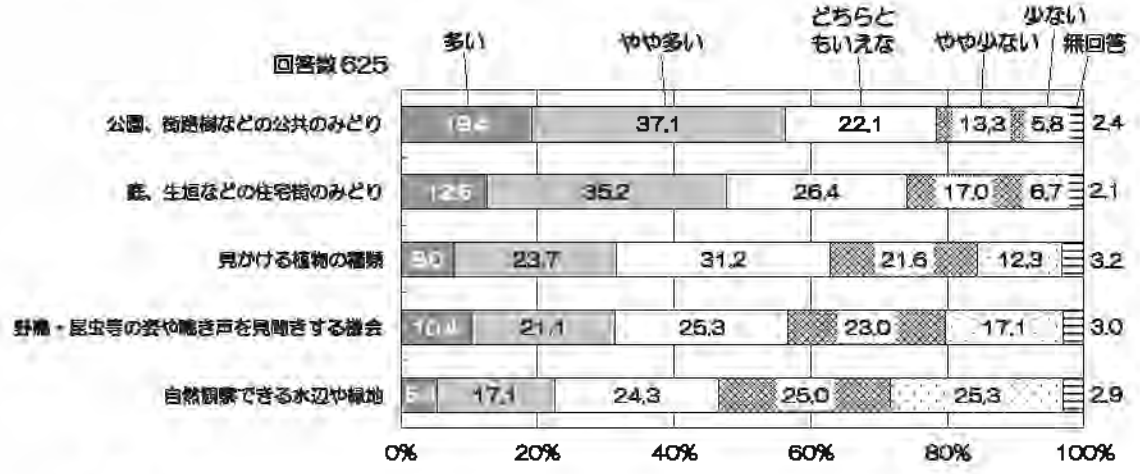


図 2-16　身近な環境について日ごろ感じていること(自然やみどりの豊かさについて)[R]

「屋上畑」の活動
(碑小学校)

バケツで田植え
(不動小学校)

自分の育てたい野菜や花を栽培する「マイ農園」活動(宮前小学校)

写真　学校の取り組み例

ビオトープ活動で泥を運ぶ(下目黒小学校)

屋上の水辺
(おおはし里の杜)

写真 企業の取り組み例